

## ■第126回 み言葉に生きる招き 《解説と黙想》

## ●第1朗読 創世記2・7～9、3・1～7

この箇所では、①人は神によって造られ②人には「環境」と「自由」が与えられ③人に原罪が入った原点を知る。「土の塵ちりで人(アダム)」が造られ「神の所有」で「被造物」の人は、神の「息を吹き込まれた」ことで生きる存在になり、肉体と魂が結ばれて「生きる者」になります。喜びや豊かさの象徴が「エデンの園」で、人に使命と居場所を与えるために「そこに置かれた。」人生の「中央」には、神に依存して生きる「命の木」(黙示録22・2)があり、愛の成立には選択の自由が必要なので「善悪の知識の木」を置き、人類の救済計画は「天地創造の前から定められていた。」(1ペトロ1・20)神から離れさせようとする「賢い蛇」はまず、イブに語りかけたのは、神の命令を聞いたのはアダム(創2・16-17)なので、責任の序列より崩せ易い者から攻めます。アダムは神の言葉を守る責任者であり、彼はイブの行為を拒否しなかったのは、(創世記3・6)①神よりもイブを上うへに置いた。②自ら判断したかった。③行うべきことをせずせにいたので罪を犯した。(ヤコブ4・17)蛇の言った通り実を食べると目は「開け」無垢むくな心に恥はが生まれて「裸」と知り、罪を隠す行為が「腰を覆う」です。神が善悪の木を造られたのは選択の自由を与え、自らを主人とするのか、神に委ねるかを決めさせるためです。この木が無いと人は罪を犯しはしなかったのですが、選択の自由はなくては「強制」となり、これを拒ひまれて「神は愛」(1ヨハネ4・8)を望まれ、今もこれが生きています。

【著者の一言】神の深い愛とみ心に触れることができ感謝です。

## ●第2朗読 ローマ人への手紙5・12～19

アダム(人類の代表者)の不従順により、人類は「罪に傾く状態」となり「罪が世に入り」これにより「死が入り」死は「すべての人に及び」人類全体が「罪の支配下に置かれた」のです。罪を意識させるために律法を与え「律法がないと、罪は罪と認められない。」神の意志に外れず「アダムのような罪」を犯さない人の上にも原罪で「死が支配した。」「全ての人々が罪を犯した」とは「正しい者はいない。一人もいない」(ローマ書3・10)ことで、詩編53・4の引用です。アダムの後に来るイエスが「来るべき方」で、彼はイエスを「前もって表す者」です。神が一方的に与える救いの「恵み」は、イエスの十字架と復活による「賜物」で、これは人を分け隔てすることなく「多くの人に豊かに注がれ」ます。神の裁きは厳格で「裁きの場合は、一つの罪でも有罪の判決」となり、赦しの「恵みが働くとき…無罪の判決」になります。アダム(旧約の代表者)によってこの世に「死が支配」され、イエス(新約の代表者)により世が「生き、支配」され、アダムの神に対する「不従順」は、人を罪人にさせ、イエスは、死に至るまで神に従われた(フィリピ2・8)「従順」により、多くの人々が正しい者にされました。

【著者の一言】個人は、先祖や親の罪は負わないが、(申命記24・16)人類を代表者するアダムの不従順が、人類全体に罪と死が入りました。

## ●福音書朗読 マタイ4・1～11

この箇所は、イエスが宣教開始される前「神の子」としての生き方を明確にされ、誘惑への勝利が語られます。悪魔が「誘惑」しますが、神が許された範囲の「誘惑を受け」(ヨブ記、1コリント10・13)イエスは「聖霊」に導かれ、試練と信仰が試される「荒れ野」で、試練の「四十日間」、(出エジプトの40年)自己の虚無化と肉体を極限状態にするため「昼も夜も断食」して、イエスが「最も弱い状態」となった時、誘惑を受けます。神の子なら、言葉によって力を見せてみよ、との悪魔の誘惑が「パンになるように命じたらどうだ」と言うと、イエスは、人は物だけでなく、神との交わりが大切なことから「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉」で生きる。(申命記8・3)次に悪魔は、神が臨在する「聖なる都」にある神殿で最も高く「見せびらかす」ことができる誘惑の場所の「屋根の端」で、神の守りを「試す」悪魔の葉をが「飛び降りたらどうだ。」すると「天使たちは支える。」(詩編91・4)イエスは「主を試してはならない。」(申命記6・16)と言われます。次に、イエスを権力と支配の象徴である「高い山」に悪魔は連れて行き「繁栄ぶりを見せ」最後の誘惑は「わたしを拝む」なら、一時的な支配ではあるが「みんな与えよう」と言う。これに対してイエスは「主を拝み、ただ主に仕えよ。」(申命記6・13)と語り、決定打を放ち、悪魔はイエスから「離れ去った。」そして「天使たちが来てイエスに仕えた。」

【著者の一言】日々の歩みを顧みると、誘惑の地雷原をうまくすり抜けており、主に守られて歩んでいる思いがしました。

著者 蒲池 明憲